

---

# 黒王の僕 <コクオウのシモベ>

猫一匹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒王の僕<コクオウのシモベ>

### 【Nコード】

N2501T

### 【作者名】

猫一匹

### 【あらすじ】

陽のない国、そこは暗く残忍で残酷な王の国。

王はその容姿から黒王<コクオウ>と呼ばれた。

・・・突如侵略しに来た黒王軍にリュミエールの姫シャリエは黒王に囚われる。

「私を殺して」…死ぬことを選択するシャリエに黒王はとある契約を話し、その残酷な契約にシャリエは黒王の妃になる。

## ・プロローグ

・陽のない国

そこは暗く残忍で残酷な王の国

皆はその王を

王の姿から 黒王<コクオウ> と呼んだ

今日も窓の向うは雨が降っていた。

この黒く暗い国で雨が降らぬ日などないのではないかと感じ始めている。

少なくともシャリエが過ごしたに日々で雨が降らぬ日はなかった。

この国に来て幾日か…

いや、？来た？という言葉より？連行？という言葉のほうが正しい。好きで来たわけではなかった。

すぐにでも自分の生まれ育った国に帰りたい。

・・・けれどそれはできない。

そういう 契約 なのだから。

窓に映る自分の姿はどこかくすんで見えた。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

## ・プロローグ（後書き）

昔書いた二次元小説をオリジナルで書き直してみたとか。

## 黒王の妃<キサキ>

シャリエは王家の娘だった。

ここではない・・・陽が満ちて豊かで輝く国、リュミエールの姫。

年老いた優しい父と、大好きな兄

白と緑のコントラストが美しい街並みは飽きることがなく、

平和で安心して暮らせるリュミエールの国民の笑顔がシャリエは大好きだった。

そして民もまた、分け隔てなく接するシャリエを愛していた。

シャリエの穏やかで優しい人柄

何より、その笑顔は美しく愛されていた。

緑豊かな地を敬愛し、澄んだ空を愛し、鳥の声を愛する

リュミエール・・・それは穢されることのない国

しかし、シャリエが18の誕生日を迎える日

ソレはやってきた。

雨は恵の雫だ。

雨が降らなければ作物は育たない。

潤いを保つために必要不可欠なものだ。

その喜ばしいはずの雨が

その日に限って何か濁りきった不快なものにシャリエは思えた。

今日は自分の誕生日なのに不安を隠せなかったのだ。

・雨と共にやってきた雷雨

・その音に紛れた轟く蹄の音

・どこか張り詰めているような空気

それに気づいたときには  
敵つい甲冑を纏った兵士たちが城内に押し寄せ  
ほんの一瞬・・・  
それはほんの一瞬で、全てが終わった。

濁りきった目をした兵士たちに  
王である父、そして兄は成すすべなく捕らわれ  
城下の民はまるで獣のごとく服を剥かれ跪かされ、食料装飾全てを  
奪われ檻に閉じ込められた。

無事だったのはシャリエ、ただ一人。

「お父様！兄様！！」

捕らわれている父と兄は

目が届く距離にいるというのにその距離は酷く遠く感じた。  
シャリエは縛られることもなく自由な身ではあったが

その周囲はぐるりと弧を描くように剣を持った兵士が囲んでいたか  
らだ。

一歩動けばその刃に貫かれそうに動くことができなかった。  
そして鉄錆びの嫌な臭いがして、シャリエは顔を顰めた。



「お前が、姫か？」

兵士を押し分けて現れた男の姿にシャリエは言葉を失った。いや、かすかに吐息のような声がかすれて出ただけ。まるで心臓が抉られるような気がして、息が止まった。

カツン、と踵を鳴らしてシャリエの目先に現れた男。

纏う衣は重く光沢のない黒

黒い鞆に収められた剣もまた黒

そして髪も深淵のような漆黒

しかし、その瞳はまるで血のようなく赤く

「……黒王くコクオウく」

シャリエの小さな口から出た名に

黒王と呼ばれた男は満足そうにその赤い瞳を細めて笑う。その笑みに背筋がぞくりと粟立った。

・・・怖い

笑っているけど、笑っていない。

それにあの赤い瞳は深く濃く、まるで澱んだ血のような色で端正な顔は生気なくその中で赤い瞳が灼々としていた。

シャリエははじめてみたソレにビクリと肩を震わせた。

その恐怖心が黒王にわかったのだらう

体を傾けシャリエの形良い耳元に唇を寄せて小さく笑うように、囁いた。

「我と来い」

「・・・嫌、私を殺して」

考える間もなくするりと口から出た言葉に迷いはなかった。

黒王の下へ行くくらいなら死んだほうがまだ。

命を粗末にするなという言葉もあるが

この男の前にはそんな言葉ほど無意味なものはないことをシャリエは知っていた。

男は黒王<コクオウ>

凜猛な黒王軍を率いては国を襲う。

しかしそれに意味はない気ままなのだ。

・・・殺せば誰でもいい

そして殺すことに躊躇はなく

残忍で残酷に命果てる姿を愛でる

そんな男だという噂はこの小さなリュミエールでも聞いていた。

そんな男に己が身を穢されるくらいなら死んだほうが良い。

しかし、そんなシャリエに黒王は嘲う。

「お前を殺しはしない」

「……え」

その時の黒王の微笑

男の言葉はシャリエを簡単に闇に墮とした。

「その代わり、王とお前の兄そして民を殺す」

体が強張った。

それを尻目に黒王は歌うように言葉を続けた。

「そうだな、お前の父兄共は生きてまま肌を剥ぎ、

手足の指から順に鼻耳唇を時間をかけて削ぎ落とそう。

目を抉るのは最後だ……互いに苦しむ姿を見せ付けあうのは楽しいからな。

痛みと苦しみで悶え死んだ後は首を切り落とし体は犬に食わせてやる。

首は酒に漬けお前にくれてやってもいい。良いワインになるだろう。お前が愛する民はその家全て燃やし身に纏うものは全て奪い取り男は全て殺し子供は家畜に食わせ女は奴隷にし我が国に連れて行く。

まあ連れて帰ったところで兵に陵虐され自ら命を落とす羽目になるだろうけど……

ただお前だけは生かしてやるよ……シヤリエ」

「な、なんて……」

なんて残酷なことを！そう叫びたかった……だけど出来なかった。この男に残酷コクオウなんて言葉は無意味だからだ。

シヤリエが愛するものを全て奪い殺しその中で生きると言う男が理解できない。

ただひとつ真実なのは、男は……黒王は本気だ。

「けれどもお前が俺の下に来るのならば

父や兄、民、お前の愛するものは傷つけさせないと約束しよう」

顔から血の気が失せ

力が抜けていく身体が揺れ  
恐怖に神経が身体が震えた。

本気なのだ男は。

シャリエが断ればすぐに実行に移すだろう。

その証拠として目が届く距離に父と兄がいる。

身体を拘束され、その背後に剣を構えた兵士が黒王の指示を待っているのだ。

「あ・・・ああ」

父と兄を見た。

口は塞がれ目には布が巻かれていて表情は読めないが  
年老いた父は辛そうに頂垂れ

黒王の言葉が聞こえていただろう兄は潜った声で唸っていた。

その唸りが黒王に対する罵倒ではないことにシャリエは気づいていた  
兄はずっと自分の名を呼び続けていた。

それを最後にシャリエの視界が黒になる。

黒王に包まれたのだ、その黒い衣に。

硬い指がシャリエの柔らかかに波打つ髪を撫で上げた。

衣から漂う血生臭さと指の嫌悪から吐き気がこみ上げるのを堪えた。  
だがシャリエの空色の瞳から零れる涙だけは堪えきれず落ちていく。

黒王の指がその涙を追い頬を伝う。

その感触が嫌で嫌で堪らなかったがシャリエは振り払えなかった。  
それを答えとして受け取った黒王は笑った。

「シャリエ・アン・リュミエール・・・お前は今から俺の妃、僕だ」しもへ

言い切ると共にシャリエの唇に黒王は口付けた。  
否、噛み付いた。

シャリエの唇から血が零れ細い弧を描くのを黒王の舌が舐めあげる  
その感触に背筋が凍る。涙がこぼれる。

これはまるで<契約>だ。

愛するものを守る生贄になるための・・・

「本来なら生かすなんて温い事したくないんだが  
今日はシャリエの誕生日だからな・・・特別だ」

「・・・」

「愛してる、我が妃」しもへ

その言葉に温かみなど一切なかった。

-  
-  
-  
-  
-  
-

降りしきる雨。

冷たい窓ガラスに縋りつけば

涙が一滴頬を伝って、闇に堕ちた。

窓に映るシャリエは声を押し殺して、泣いていた。

まるで自分の心のようだ、雨は降り続けていた。



## 黒王の檻くオリ>

気高く

残忍で残酷で血を身に纏ったその人は  
屍を踏み鳴らし、骨を剣に、抉り取った瞳を潰す。

非情なる王

コクオウ  
黒王はそれでも偉大な王だった。

光がない国をはじめて見た。

朝も昼も夜も・・・その空は黒く厚い雲に覆われて飽くことなく雨  
を降らした。

鉄を溶かす際に吹き上がる赤く熱い煙が雲となって絶えず流れ  
それをぼんやりと眺めるシャリエの視界を覆っていく。

どのくらい経ったのか

遠くで鉄の重い扉が閉じる音がして  
そしてようやくシャリエは名残惜しげに窓から離れた。

- コクオウ黒王が帰ってきたのだ。

・・・カチャ、カチャ

茶器の音が静かな部屋に響く。

シャリエは以前よりも馴れた手付き、それでも些か不安定な動きで  
お茶を淹れる。

一国の姫であったシャリエは勿論お茶の淹れ方など知らない。

何度も何度も茶器を割り、その度にできた切り傷

お湯が零れ撥ね、その度にできた赤い小さな火傷が今だシャリエの  
白い手に痕を残していた。

それでもやらなければならなかったのは

黒王が望んだからだ。

この黒王の国に来て2ヶ月

あの後、父と兄には声をかけることさえ許されず

黒王の衣に包まれたまま担がれ、ここまで連れて来られた。

まるで荷物のように担いできたシャリエを、寝台に下ろすときは酷く丁寧だった。

父や兄、民はどうなったのかと溢れそうになる涙を堪えて詰め寄ったが

「約束は守る」

そう一言だけ残し隣の部屋へと踵を返す黒王の背中をシャリエはただ、哀しみだけを秘めて見つめた。

黒王の屋敷は閑散としていた。

妃となったシャリエを出迎えたものは二人の侍女と数人の兵士だけ。シャリエが何を聞こうが何も喋らず答えず沈黙を守る。

侍女が口を開くのは挨拶か黒王からの指示だけだった。

そして必要以上にシャリエの傍には現れない……。

驚いたことに黒王はシャリエを抱かなかった。

いつ、いつ来るのかと恐怖し

それでも父や兄たちのことを思うと必死で覚悟を決めた。

だが一週間経つてもシャリエの寝台にはシャリエ一人だけ。

連れて来られて早々から黒王はシャリエに

自分の身の回りの世話をするように命じ、それに対して酷く驚いたのを今でも覚えている。

世話とは言え夜のことではなく、ただまるで自分につく侍女のようなことをするだけだ。

ならば黒王が侍女を使えばいいのに、何故私なのか。

二週間も過ぎれば

その頃にはシャリエも薄々気づきはじめていた……。

自分は妃キサキとは名ばかりの、ただの僕シモスなのだ……と

抱けばいいのに

いつそ滅茶苦茶に弄り蹂躪してしまえばいいのに

そうすれば自分は黒王をもっともっと憎み続けられるのに。

だが、黒王は抱かない。

最初こそ安心したものの

今ではそれが怖いだなんて・・・滑稽だとシャリエは俯いた。

何も変わらない毎日はシャリエを冷静にさせ・・・何より落ち着かせた。

それが意味することをシャリエはわかってしまった。

馴染んでしまったのだ、ということに。

それが恐ろしく、怖い。

だからこそ黒王が自分を抱けばその連鎖を壊すことができるのに  
だが、黒王はシャリエに触れることはなかった。

薄暗い屋敷を、蠟燭が朧げに照らす。

陶器のポットを傾け色づいたお茶を茶器に注いだそのタイミングで部屋の扉が開かれた。

「帰った」

「おかえりなさいませ・・・黒王様」

自分を見つめる黒王の視線に耐え切れず、シャリエは俯く。  
耳元から琥珀色の髪が一房こぼれシャリエの顔に影を作った。

「お茶を、おいれました」

見ればわかることだろうが

黒王の視線に耐え切れずシャリエはテーブルに案内した。

その間も黒王はシャリエを見つめる。

いったい、自分の何を見つめているのだろうか？

だが、シャリエはそんな黒王が羨ましいと思った。

）（貴方は見つめる先があるだろうけれど・・・私には何も無いのに。）

肉親も友も、話す相手さえ満足に居ず

ただ名ばかりの妃として黒王の傍にいるしかない自分。

そう思う度鮮やかな祖国の思い出が眩しすぎて、シャリエは瞳に水膜を作った。

窓の外はいまだ止むことない雨が降り続け  
そして鉄の赤い雲が棚霧っている。

）・・・ああ、まるで檻おじだわ（

ここは決して逃げることのできない 檻

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2501t/>

---

黒王の僕<コクオウのシモベ>

2011年8月11日06時51分発行